広報
かみす
2019年
No.296
1/1・15

Pick up
▶市長・議長から
新年のごあいさつ

特集
まちの魅力再発見
息栖神社
東国三社とまちの賑わい

鹿島神宮、香取神宮とともに東国三社の一つと称され、多くの文人墨客が訪れてきました。水上交通が盛んな頃は息栖河岸とともに、まちの賑わいを創り出してきました。近年は東国三社詣やパワースポット巡りで、参拝者が増加しています。新年を迎えた今、息栖神社の魅力を再発見します。

AR 広報かみすが動き出す
【COCOAR2】
アプリをダウンロードし表紙にスマートフォンをかざしてください。
詳細は18ページ

まちの魅力再発見

特集

息栖神社

東国三社とまちの賑わい

東国三社詣やパワースポット巡りのブームとともに、息栖神社への注目が高まっています。県外から訪れる参拝客や観光客も増えていますが、なぜ多くの人を惹きつけるのでしょう？今回は、息栖神社の歴史や魅力に迫ります。

神話と歴史

東国三社の由来とは

東国三社というのは、鹿島神宮、香取神宮、息栖神社の総称です。全国的に有名な鹿島神宮、香取神宮に比べると、息栖神社は規模、知名度ともずいぶん差があるように感じます。それなのになぜ、この三社が並び称されるのでしょう？

由来は、上代の昔まで遡ります。天孫降臨に向けて天照大御神（あまてらすおおみかみ）から遣わされ、「国譲り」神話で功績をあげたのが東国三社の御祭神です。このとき鹿島神宮と香取神宮の神々を道案内したのが、息栖神社の御祭神である岐神（くなとのかみ）（久那戸神）、天鳥船神（あめのとりふねのかみ）とされています。

久那戸神図
（神栖市歴史民俗資料館所蔵）

水や交通に関わる神を祀る

息栖神社が最初に置かれたのは現在の日川地区と伝えられており、大同2年（807）に現在地に遷されました。岐神（路の神・井戸の神）、天鳥船神（交通守護の神）に加え、住吉

三神（海上守護の神）が祀られています。

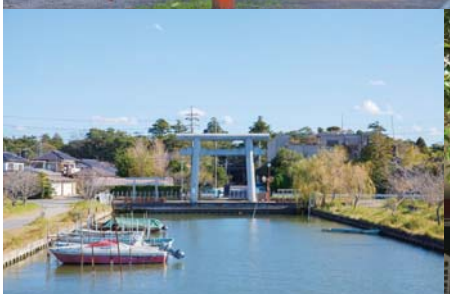
息栖神社は鹿島神宮の摂社という位置づけです。これは、鹿島神宮と縁の深い神を祀る神社のこと。手子后神社（神栖市）、大洗磯前神社（大洗町）とともに、「鹿島神宮の三摂社」と称されることもあります。

東国三社詣

東国三社詣のはじまり

江戸時代初期に、江戸湾（東京湾）に注いでいた利根川を銚子に向かわ

江戸時代の息栖神社と息栖河岸の賑わいを描いた鳥瞰図
『鹿島志』（神栖市歴史民俗資料館所蔵）より



上／装いを新たにした息栖神社、下左／一の鳥居と船溜まり、下中央／拝殿、下右／二の鳥居

せる河川改修事業「利根川東遷」が始まり、舟運が発達します。それにより、下利根地方を船で巡拝しながら風光明媚な景色を楽しむ物見遊山の旅が盛んになりました。

特に、江戸時代中期はお伊勢参りが大流行し、伊勢から無事に帰ったことを感謝する「下三宮参り」「お伊勢参りのみそぎの三社参り」などと呼ばれる東国三社詣が一大ブームを巻き起こします。息栖神社の目の前にある息栖河岸は、利根川水運の拠点として連日大いに賑わいました。

ジオラマで見る息栖

神栖市歴史民俗資料館では、当時の息栖神社と息栖河岸を表現したジオラマを見ることができます。保立純子館長が、ジオラマを指しながら解説してくれました。

保立館長

「江戸をはじめ各地からの旅行者を運んだのが、木下河岸から出る“木下茶船（きおろしちゃぶね）”と呼ばれる乗合船でした。安永7年（1778）から天明9年（1789）の12年間にわたって、1日平均12艘も運行され、年間約1万7千人が利用したといわれています。息栖神社と関わりの深い柏屋旅館は、江戸時代から息栖河岸の前で営業しており、指定宿となっていました。

昔は利根川の水深が今より大分浅く、一の鳥居とその両脇の忍潮井（おしおい）の鳥居は川の中に立っています。ずっと後の昭和48年に河川改修をした際、船溜まりのほとりの現在地に移されました」

歴史民俗資料館は“水と人々のくらし”を主なテーマとしているため、息栖河岸の隆盛や、水路を利用した

当時の息栖神社と息栖河岸を表現したジオラマ

江戸時代の旅事情など、水との関わりという視点から息栖神社への理解を深めることができます。

多くの文人墨客が来訪

東国三社詣が人気を集める中で、多くの文人墨客も三社のあるこの地域を訪れています。松尾芭蕉、吉田松陰、賀茂真淵の高弟である加藤千蔭、村田春海、小林一茶、十返舎一九、渡辺崋山、大原幽学など、そうそうたる顔ぶれです。

明治の文豪・徳冨蘆花は、息栖神社前の柏屋旅館に滞在して執筆。名著『自然と人生』の中で、「利根の晩秋」と題して息栖神社の風景を叙情豊かに描写しています。

大正時代になると神之池周辺のリゾート開発が進み、華族、軍人などの往来が増えます。その時も息栖河岸が玄関口となり、柏屋旅館が当時としては珍しいフォード車で客を送迎するなど、地域の発展を象徴する光景が見られました。

多くの文人墨客が宿泊した柏屋旅館
（大正～昭和初期）

地域との関わり

「神栖」という地名の由来

ここからは、息栖神社と地域との関わりを見ていきましょう。

まず神栖という地名の由来です。昭和30年、軽野村と息栖村が合併し、神栖村が誕生。このとき、神之池と息栖神社から「神栖」という村名が付けられました。

その後、神栖町、神栖市となり、東国三社詣やパワースポットが注目される今、「神の栖（すみか）」という意味を連想させる地名にロマンを感じる参拝客が多いようです。

神社を支える氏子総代

かつて息栖神社は、神主のいない期間が長く続きました。大切な祭事の際は、鹿島神宮の神主が派遣されてきたといいます。そこで、柏屋旅館の主人が神職の資格を取り、神主を務めていた時期もありました。現在は、神職の小澤八宏（はこお）夫さんに臨時の神主をお願いし、息栖神社の宮司としてほぼ常駐してもらっています。小澤さんは「息栖神社は、熱心な氏子総代の方々が中心となって運営されています」と話してくれました。

地域の鎮守を大切に守っていこうと、氏子が自発的に総代会を組織。息栖地区から7人、息栖原地区から2人の計9人が、3年任期で氏子総代を務めています。氏子総代は、祭事の準備や運営、忍潮井の清掃や境内の整備、社務所での参拝客への対応など、一年を通してさまざまな役割を果たしています。

身近で大切な存在

氏子総代会長を務める松沢一好さんに、暮らしの中でどのように息栖神社と関わってきたのかを聞いてみました。

「子どもの頃は境内が遊び場で、よく椎の実を拾った思い出があります。それから、私も副会長の大塚光男さんも、息栖神社で結婚式を挙げ

上左／息栖河岸から神之池へフォード車で送迎、上右／当時の息栖神社
下／水上交通が盛んだった頃の息栖河岸　（上下とも大正～昭和初期／神栖市歴史民俗資料館所蔵）

て、柏屋旅館で披露宴をしました。昔はそうする人が多かったんです。息栖神社はあまりにも身近な存在で、歴史や由緒を改めて意識したこともありませんが、氏子総代の役目は当たり前のこととして親から代々受け継ぎ、これからも継承していきたいと思っています」

多彩な祭事

今に受け継がれる祭事

息栖神社では1年間に11回の祭事が行なわれています。主な祭事について、運営の裏話も含めて話を聞きました。厳かな神事だけでなく、華やかなお祭りや家族揃って楽しめるお祭りも行なわれ、ここで紹介する他にも多彩な祭事があります。ぜひ足を運んでみてください。

大祓　12月31日
元旦祭　1月1日

「1年で最も息栖神社が賑わうのが初詣です。大晦日の朝から夜通し初詣客の対応をし、元日の夕方7時頃まで社務所に詰めています。初詣で東国三社巡りをする方も多いので、7日までほとんど休みなく神社にいます。氏子総代を務める3年間は、家でのんびり正月を過ごすことはありませんね」(氏子総代会長・松沢さん)

氏子総代会長 松沢さん

祈年祭　3月6日

「3月9日に鹿島神宮で春の始めの神事として祭頭祭が行なわれますが、神栖市内の地区が当番となった年は、鹿島神宮に先駆けて息栖神社にも祭頭囃が奉納されます」(氏子総代副会長・大塚さん)

例大祭　4月13日

「神社にとって最も重要な神事で、神社本庁から派遣された神職が祭詞を奏上します」(神職・小澤さん)

大祓(みそぎ祭)　6月30日

「昔は神主が川に入って身を清める儀式をしましたが、いまは常陸利根川に船を出し、7回半回って竹を割って川に投げ入れる儀式を行ないます。これにより、船上の神主も川の水も清められます。井戸・船・川の安全を祈る祭りとして、古式に則って行なわれています」(神職・小澤さん)

神職 小澤さん

「2カ月前から準備を始め、忍潮井の清掃もして当日を迎えます。当日は拝殿の前で餅撒きをしますが、その餅を拾うとご利益があるため、氏子が200人近く集まって境内が人でいっぱいになるんです。」(氏子総代副会長・大塚さん)

氏子総代副会長 大塚さん

「御船祭」の先導役

東国三社のつながりが色濃く表れる祭事もあります。それは、鹿島神宮最大の祭典とされる「御船祭(みふねまつり)」で、12年に一度行なわれます。

鹿島神宮の御座船を先導する息栖神社の船

まず、天皇陛下の勅使をお迎えして例祭を行ない、翌朝 „鹿島立ち“ の大行列が大船津へ向かいます。お供の大船団とともに、鹿島神宮の御神輿が御座船で巡幸し、香取神宮の御祭神と水上で出会う、壮麗な祭典です。

この時、息栖神社の先導船が重要な役割を果たします。鹿島神宮の御座船を先導して浪逆浦を経て加藤洲まで行き、そこで香取神宮による御迎祭という儀式が執り行なわれるのです。まさに「鹿島神宮と香取神宮の神々を息栖神社の御祭神が道案内した」という神話の世界が、目の前で展開されるようです。

「ささら舞」奉納の歴史

神栖市の無形文化財に指定されている田畑地区の獅子舞（ささら舞）も、その歴史を辿ると鹿島神宮と関わりがあります。歴史民俗資料館にその装束が展示され、由来が記されています。それによると、江戸時代の中頃まで鹿島神宮の神幸祭で神事の先ぶれとして奉納され、その後、大正10年頃まで息栖神社の例大祭で奉納されていました。この舞がないと神事が進行しないため、「飯前ささら」と称し、早朝に行なわれたそうです。現在は、7月の最終日曜日に、地区の鎮守である白鳥神社や西福院に奉納されています。

西福院での奉納の舞

地域の郷土芸能にも、鹿島神宮と息栖神社につながる歴史があることを知ると、また新たな視点で見ることができそうです。

現在、再びブーム到来

参拝客が急増

パワースポットや御朱印集めがブームとなる中で、東国三社詣や息栖神社が再び見直されています。長年にわたって息栖神社を守ってきた氏子総代の皆さんによると、テレビで取り上げられてから急激に参拝客が増えたといいます。

特に人気なのが「東国三社お守り」です。これは、木製の本体に、三社を巡っていただいた御神紋シールを貼り付けて完成させるものです。

人気のパワースポット

パワースポットとしても注目を集めています。とくに「忍潮井（おしおい）」を目当てに訪れる観光客は少なくありません。常陸利根川沿いの、一の鳥居の両側にある2つの井戸が忍潮井。辺り一帯が海だった頃から1000年以上もの間、潮をおしのけて清水が湧き出し続けてきたとされており、伊勢の明星井、伏見の直井とともに、日本三霊泉の一つに数えられます。この井戸の底に据えられた男瓶（おがめ）・女瓶（めがめ）が見えれば幸運が訪れるとされています。女瓶の水を男性が、男瓶の水を女性が飲むと縁結びのご利益があるとも伝わりますが、現在は直接飲むことはできません。

日本三霊泉の一つ（左／男瓶、右／女瓶）

また、境内の「招霊（おがたま）の木」は幸運をもたらす精霊が宿るとされ、近寄るとパワーをもらえるそうです。

さらに、東国三社を地図上で結ぶと、ほぼ直角二等辺三角形になることや、香取神宮の真東に息栖神社が位置していることなど、その神秘的な配置も話題となっています。

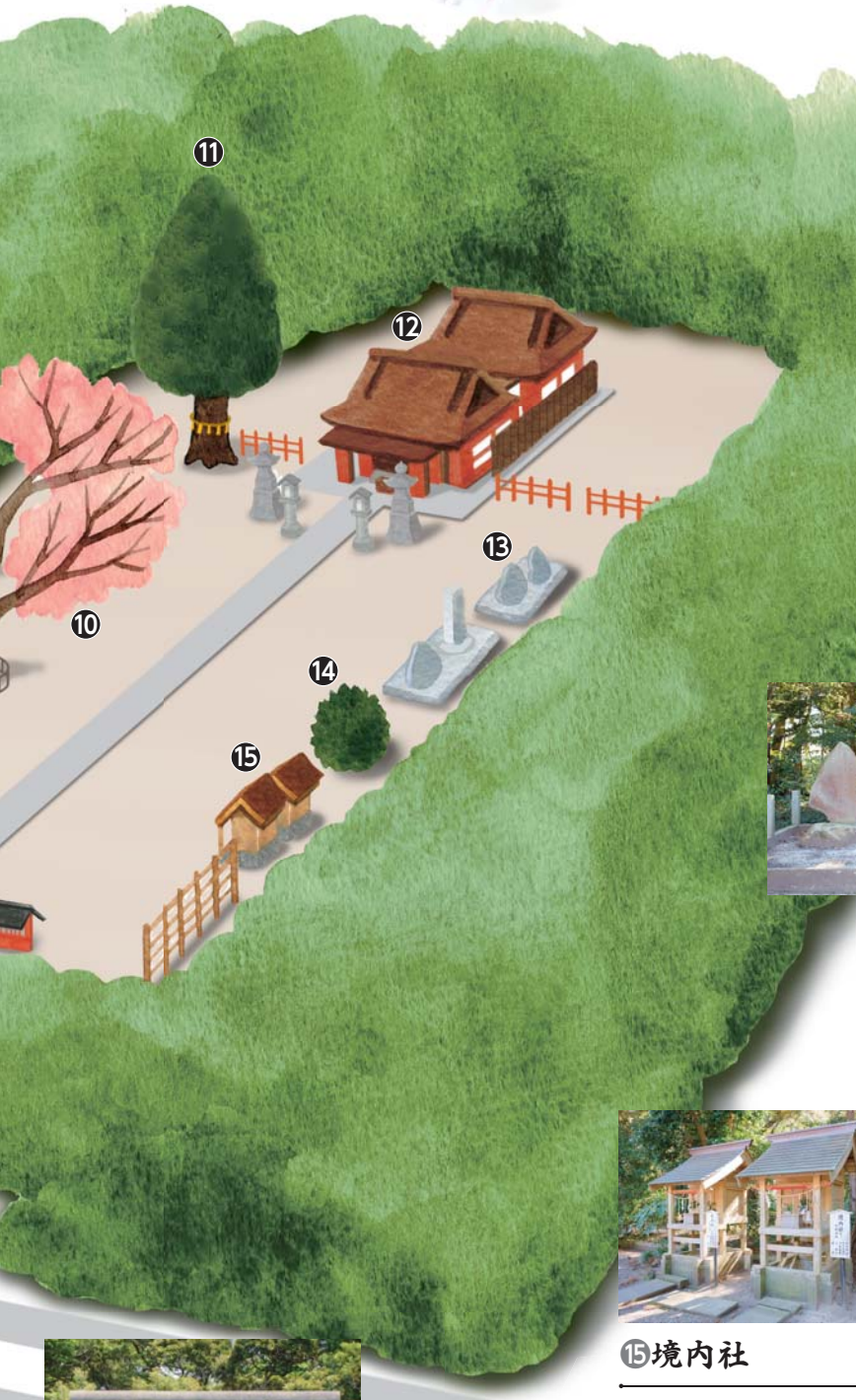
深い森に包まれ、清浄な空気を全身で感じられる息栖神社。境内を散策すると、さまざまな歴史や神話に出会うことができます。次のページで、見所をご紹介します。

息栖神社 散策マップ

静かな境内に、たくさんの見所がギュッと詰まっています。
ぐるりと一周すれば、神秘のパワーがもらえそう。
歴史と神話の宝庫へ、さあ出かけましょう！

⓫御神木

樹齢約1000年と推定される夫婦杉。横から見上げると、2つの幹が根を1つにしているのがわかります。



⓬社殿

手前の拝殿で参拝します。奥の本殿は、神職しか入れない神聖な場所。参拝後、社殿の外をぐるりと一周歩いて見ませんか。

⓭息栖ゆかりの歌碑

「鹿島潟 沖洲の森のほととぎす 船をとめてぞ 初音ききつる（藤原時朝）」など文人墨客の歌が刻まれています。

⓮招霊（おがたま）の木

精霊が宿る木に近寄って、パワーをもらおう！

⓯境内社

2つ並んだ祠に、9柱の神が合祀されています。ここに参拝すれば、9つの神社に詣でたことになるそうです。

❷二の鳥居

❻神門

江戸時代の弘化4年（1847）に建てられたもの。緑の森に鮮やかな赤が映え、風格があります。

御朱印

社殿左側の社務所でいただきます。数年前に朱印の書体が変わり、三笠宮崇仁親王殿下から下賜された印も押されます。

⑩みや桜

昭和５年７月、昭和天皇の弟の三笠宮崇仁親王殿下が参拝時に植樹されました。春は美しい花を咲かせます。

東国三社お守り

木製の三角柱の本体に、東国三社で御神紋シールをいただいて貼るとお守りが完成。すぐ完売となるので、すんなり手に入るだけで幸運かも！

⑧松尾芭蕉の句碑

「この里は　気吹戸主（きぶきとぬし）の　風寒し」と刻まれています。息栖神社は、江戸時代には気吹戸主神を主神とした説も……。

⑨社務所

御朱印やお守りの受け渡しはこちらへ

⑦力石

かつて、祭礼に集まった若者たちが力くらべをした石。高々と持ち上げた者が、栄誉を受けたと言われています。

⑤手水舎

参拝の前に、必ずここで手と口を清めましょう。

④稲荷神社

赤い布でほおかむりした狐がずらりと並んでいます。

③忍潮井

二の鳥居から本殿とは反対側、常陸利根川方向へ 200m ほど歩きましょう。息栖河岸の渡船場跡にあるのが忍潮井。川に向かって左側の井戸の底に女瓶（土器の形）、右側に男瓶（銚子の形）が据えられています。幸運を呼ぶ男瓶・女瓶が見えるかどうか、覗き込んで運試し！　井戸掃除（3・6・9・12 月）の直後がチャンスかも。

①一の鳥居